
吐き出せドドメ色の脳細胞

踊る肉団子甘酢和え

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吐き出せドドメ色の脳細胞

【Nコード】

N4399M

【作者名】

踊る肉団子甘酢和え

【あらすじ】

適当に思い付いた端から書いて行くだけの駄文集。要望があれば続きを書くかも知れんけど……………いや多分書かねえな（笑）

f a t e 〱 八年後の冬木市 〱 (前書き)

突然浮かび上がったモノをそのまま書いてみた。

兎に角書きたかった。

書きたかったから書いた。

後悔はしていない。

軽い気持ちで読んでくれれば幸いです。

f a t e 〱 八年後の冬木市 〱

「本当にやるんですか？」

「当然だ。だからこそ極東の島国のこの街にやって来たのだからな。ああ、本来ならもっと早くにこうすべきだった。」

「ですが何故今になって？」

「今だからこそ、だ。再びあの忌まわしい大礼儀が発動する前に根本から解体する。その為にこの管理者であるキミに同行をお願いしたのだ。」

「ですがアレは八年前に破壊されています。ですから……」

「もう起きない、とでも？もし本気でそう思っているならそれは間違いだ。」

「……………」

「キミも気づいているのだろ？アレは所詮【人造の器】でしかない、と。あの大礼儀の核となるモノは別にある。それに、だ。前回、前

々回と満たされた魔力が殆ど未使用のまま器が消失している今のこの状態、次回の大礼儀が何時になるか誰にも分かっていないのだ。」

「……………それは分かっています。」

「いい加減覚悟を決めたらどうです、ミス？僕等はただソレだけの為に集められたんですよ？」

「……………」

「ま、貴女の気持ちも分からなくはないんですけど、ね？」

「何か連絡はあったか？」

「幾つか来ましたよ。一応、自分なりに解析してみたんですけど……
…ヤッパリ先生の読みどおりみたいですよ。」

「なら【あの山】が……………」

「それにしても最初はビックリしましたよ。いきなり先生から手紙が来たと思ったら【直ぐに時計塔に来てくれ】っですもん。僕はついに先生が派閥を作るんじゃないかってワクワクしてたんですよ？」

ま、蓋を開けたらタダのお手伝いだったんで少しガツカリしましたけど。」

「嫌なら帰っていいぞ？こんな事に無理に付き合ってもらう必要はない。」

「まさか！僕等はタダのお手伝いでも喜んでやりますよ。それだけ僕等は先生を慕ってるんですから。」

「そうか……………すまん。」

「そのセリフは時計塔のお偉方に言っておいて下さいよ。【あの時計塔の名物講師が自ら鞭を取った生徒を一人残らず集めて何かする気だ】なんて話がちよつと流れただけで大騒ぎだったじゃないですか。」

「……………楽しそうに言うんじゃない……………」

「いやいや、楽しそうじゃなくて楽しかったんですよ、実際。普段はやれ礼儀だ血統だなんて言ってるあの時計塔の石頭共が慌てふためく様は傑作でしたよ。」

「……………頭痛くなってきた……………」

「…心中、お察します。」

「にしても良く本家が許可しましたね。アッチからしてみたら先生は現行の当主よりも名が売れてるから最悪、十数年前の再現が起これかねないってのに。」

「ああ…それはその…なんだ…ごまかして来た。」

「「は？」」

「さっきオマエが言っていただろ、時計塔の噂。丁度良かったからアレを利用して【新しく派閥を作る為の結成式】って事にしておいた。」

「え？じゃあ本気で？」

「いや、後で適当に理由を付けてうやむやにするつもりだ。」

「なんだガツカリ。」

「期待するな。第一知っているだろう、私はそんなモノに興味はない。それよりもさっきから鳴ってるぞ携帯。」

「おっと。ハイハイこちらA班つと。……………先生、一通り調べ終わったみたいです。次の指示は？」

「撤収だ。大体の用途は立ったからな、明日からソッチを本格的に調べる。」

「了解」

「キミも良いな？」

「…はい、この土地の管理者として出来る限りの協力は致します。」

「それは暗に個人的には賛成しかねる旨を遠回しに意見していないかね？」

「そう取って貰っても結構です。」

「ハア……………まあ何にせよ明日以降だ。でなければ結論は出ないだろう。」

「先生、連絡終わりました。」

「ん、なら我々も撤収しよう。」

「はい」

f a t e 〱 八年後の冬木市 〱 (後書き)

第6次聖杯戦争が起きない理由は彼のお陰。プロフェッサー・カリスマ、マスター・V、グレートビッグベン ロンドンスター、女生徒が選ぶ時計塔で一番抱かれない男…… e t c .

数々の異名は伊達では……………あるか。本人は魔術師として大成しないし。

でもワタシは彼の小市民っぷりに惚れている。誰がなんと言おうと絶対なんだから!!

F a t e の 金ピカ

それは私の何気ない一言から始まりました。

「UBWルートでさあ、金ピカがバーサーカーフルボッコにしてん
じゃん？それってバビロンの中ランクA宝具がゴロゴロしてるって
こと？」

「ああゝ…それもあるけどそうじゃない」

は？どういう事だよ弟よ。

「お前バビロンのランク知ってる？」

確かA++でしたよね？

「じゃUBWルートで金ピカがどうやってバーサーカーを攻撃して
たか覚えてるか？」

ジャンジャンバリバリ射出しまくってましたよねバビロンから。

「バビロンからの射出」バビロンの攻撃だから」

は？今なんと？

「バビロン内の宝具もランクだけならAだとかBランクのヤツがゴロゴロしてるけど、バビロンからの射出は「射出された宝具のランク」じゃなくて「宝具を射出したバビロンのランク」で攻撃判定が発生してるから迷惑な話、バビロンから射出された宝具はみんなランクA++なんよ」

ええ、バビロンどんだけ！？

「ちなみにバビロンのランクA++は金ピカが持つて初めて発揮されるランクだから。他のヤツがバビロン使っても精々B止まりだと思うよ。あの金ピカ個人の保有魔力量が他の英霊と比べてもダントツだから」

うは、金ピカもパネエ！！

「あとアーチャーもバーサーカーを七回殺してるけど」

なぜ今ここでアーチャーの話？

「あれは【七回殺した】じゃなくて【七回しか殺せなかった】が正しい」

どういう事でしょうか弟様？

「単純な話、バーサーカーを殺せる武器が固有結界内にないんですよ。いくら限りなく本物に近い偽物でも、ランクが元よりも下がってランクA以上なんて破格の宝具そうそうないから。」

へえ。

「それと金ピカがバビロン内の全ての宝具を使えるのにも理由があるって……………」

ふんふん。

「金ピカは後の英霊達全ての原典だから金ピカの全身のどこか一部は全英霊の体のどこか一部とそっくりなんよ、だから偶像崇拜の理論からあらゆる英霊の象徴たる宝具を使えるの。」

そうだったんスカ！？

とまあ、こんな感じで日々ムダ話に花を咲かせている我々なのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4399m/>

吐き出せドドメ色の脳細胞

2011年10月6日23時20分発行